

---

# ガラスの仮面

宮沢 優衣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ガラスの仮面

### 【NZコード】

N8189B

### 【作者名】

富沢 優衣

### 【あらすじ】

二人の大学生が創りだす恋愛ファンタジー小説です。

(前書き)

登場する人物名は、全て架空の人物です。

-----一緒に

ずっと

3月9日 優、祥子

-----学校の校舎に刻まれた文字、これは二人の未来、一人の夢である。

キーンコーンカーンコーン。

終業のチャイムが鳴る。

クラスの中はざわめきが残るまま、帰宅の用意をする学生が大半だ。

その中に、マイペースにしている一人、速水優と金谷祥子がいた。

速水優は、成績優秀、運動神経良しの誰からも好かれる人物だった。

そして、その優よりも、抜きんでた才能を持つ、金谷祥子は、いつもマイペースに行動していた。終業と同時に、予習を始めたかと思えば、ものの3分で読書をするといった、どこか天然を思わせるような人物だった。

そして今日も、予習をしたかと思えば、鞄をあさり、パンを食べ始めたのだ。周りから見たら、帰つてから「飯を食べれば良いの」と思われるような行動だ。

「祥子、今日も行くんだろ？ いつもの喫茶店に」

そして、話し掛けてきたのは、速水優だった。

「うん！もちろん！ あそこのカフェオレ大好きだもん」

この二人は、放課になると、いつも喫茶店に寄っていたのだ。

「よし、じゃ行くわ。」

そして、他愛無い話をしながら喫茶店に向かつ途中、偶然ネコが通りかかった。

「あつ、ネコー可愛いなあ、私もネコみたいてよく言われるし、前世はネコだったのかなあ。」

「まあ、マイペースな部分はネコだつたんじゃないか?」

「でも、ネコつてマイペースつて言われてるけど、ネコのペースと人間のペースつて比べられないと思つ。」

「まあ、そりゃあな。あ、着いたわ。」

珈琲の香が漂つてくることに気付くと、一人は足早に喫茶店へと向かつた。

「こんにちは。」

「いらっしゃ…

なんだお前たちか。お客様かと思つたぜ」

「俺たちだって一応客だよ。」

「あー、いつもので良いのか?」

「うん!カフュオレとコーヒーね!」  
「はいよ、ちよつと待つててな。」

常連客となっていた、優と祥子は、カウンター席に座り、マスターの作業を見ていた。

「ふう〜。やっぱりここが一番落ち着くなあ。」

「優もそう思う?私も落ち着くなつて思うんだ〜。」

珈琲豆の芳醇な香りがする所は、一人にとつて落ち着く場所になつていたのである。

「そういうえば祥子に相談したいことがあるんだけど、聞いてくれる?」

「ん?なになに?恋バナつてヤツ?」

「…。祥子にだけは恋の相談しないよ。。。だつて、いつも俺のタイプじゃないやつ紹介するしさ。就職をどうするかつて相談だよ。」

「なんだ。つまんないの。でも、優の就職つて内定取れたんでしょ?」

「まあね。でも、正直俺がやつていけるかどうか、不安なんだ。」

「不安つていつても、優が就職したいつて決めた所に決まつたんでしょう?何が不安なの?」

「ああ、自分が本当にやりたいことつて別にあつたんじやないか、仮に内定取れたとこがやりたいことだったとしても、自分を作つてしまつてるから、そのままいったら、本当の自分を見失うんじやないかって思うんだ。」

「ふむふむ、要するに、自分のやりたいことがはつきりしてないん

だね。でもさ、やる前から分かんないでしょ？本当にやりたいのか、やりたくないのかなんて事は、実際に働いてから考えることじゃない？」

その時、マスターがカウンター席に座る一人の前に、いつものカフエオレとコーヒーを置いた。

「なんだ？仕事の詰みか？」

「そういうの。内定取れたところがやりたい」とかどうか不安なんだって。」

「ふん、やる前から何弱気になつてるんだか。やるんならやれ。やりたくないなら、やりたいことを考えろ。俺に言えるのはそれくらいだ。」

そう言い残して、マスターは洗い残した食器を洗いに奥に行つたのだった。

「やうやく、マスターの言つ通りだよ。」

「まあそういうだな。やる前から判断しても仕方ないもんな。やつてみてからどうなるか考へることにするよ、ありがと。祥子、マスター」。

「どういたしまして、それに、約束したじゃない。。。」

消え入りそうな声で祥子は俯きながらそう言つた。

「ん？どうした？」

「ううん、美味しいなつて、このカフエオレ。」

「ああ、いつもと変わらない味だけど、それがすうじいんだよな。」

「うん。冷めてても美味しい~」

「ああ。

つて、結構長居しちゃったな。相談も出来たし、そろそろ帰らうか。

」

「ん、そうだね。じゃマスター、お会計お願いします。」

「おお、もう帰るのか、どうせ明日も来るんだろう? 今日はサービスだ、百円にしてやるよ。」

「えつ、良いのマスター?」

「常連客だからな。たまには良いだろ?」

「やつたあ、びつせだから甘えいやおつよ、ね?」

「わうだな。ありがと~、マスター!」

二人は、マスターにお礼を言つて、店の外に出た。

外は日が沈み、夜の風と共に、闇が迫つてきいていた。

「そろそろ暗くなってきたなあ、今日は遅いから送るよ。」

「ありがと~。今日は寄りたい所あるんだけど、いい?」

「ああ、行くよ。」

そして、了解を得た祥子は、待ちきれなかつたのか、駅の方へ歩き

だしていた。それを追うように、優も後からついていった。

電車に乗り込んだ二人は、喫茶店での余韻を思い出して、目的の駅に向かっていた。

「何を見ても驚かない？」

「まあ、大抵のものならな。」

その事を確認すると、安心したような笑みを浮かべ、それからは一言も発しなかった。

目的の駅の手前で、祥子は立ち上がり、優を促した。

「そろそろよ。」

「え？ ここは……。」

駅に到着した電車は、一人だけを降ろし、また次の駅に向かった。

「そう、今日はここに来たかったの。覚えてる？」

「あ、えっと……。約束が……。」

「そう、約束よ。ここは私達の約束の場所よ」

そこは、学校。

二人が通っていた、高等学校だった。

その校舎の一人だけの秘密、そして、そこに刻まれた文字、刻まれた未来を。

「…そうだ。。。」こは俺たちの約束の場所 - - 。

「そうよ、優が言いだしたのよ? 一人でここに未来を、夢を刻もうつて。思い出した?」

そう、そこに刻まれていた文字、それは、一人が描いた未来、夢だつたのだ。

「ああ、全てを思い出したよ。何で俺は忘れてたんだ。」

「忘れていたんじやないわ。ただ私がそうさせただけ。高校までは、優の方が成績良かつたのよ? それが、今は、私の方が成績は上。それで、優は勉強をしたのよ。大事な約束を忘れるくらい必死になつてね」

「ああ、そうだ。俺は祥子より成績が上だつた。だけど、高校卒業の日に俺たちは - - 。」

「そうよ、名前と性別、姿形全てを交換したのよ。」

「そして、その期限が、今日、3月9日つて訳だ。」

「…。私たちは、四年間お互いにお互いを知つた。」

「体を交換してまでな。」

「だけど、それも、今日の七時でおしまい。全て元通りよ。」

「ああ、分かつていて、あと1分だな。」

「ええ。今までありがとうございました。そして、さよなら。四年間楽しかつ

たわ。」

「そりだな。そろそろだ。ありがとう。俺も楽しかったよ。」

キーンコーンカーンコーン

不意にチャイムが鳴った。

二人は、一人だけの秘密を四年間、この場所に刻むことで未来を、生きていた。そして、二人は、刻まれていた文字 - - - 未来になっていた。

- - - - - いつまでも一緒だよ。

ずっと気持ちは変わらないよ。

大好きです。

3月9日

優、祥子

- - - - -

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8189b/>

---

ガラスの仮面

2011年1月30日02時44分発行